

---

# 青を守るゼロ

Sierra-312

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青を守るゼロ

### 【NZコード】

NZ9985NZ

### 【作者名】

Sierra - 312

### 【あらすじ】

死の運命を背負つて生まれた獣がいた。

諦めの中にいた獣を一人の少女が励まし、生きようとする切欠を与える。

獣は吼えた。

「生きたい」と……。

その獣の願いを叶える様に獣の前に白き機械仕掛けの獣が現れた。

## 01・目覚めるゼロ（前書き）

主人公はライガーです。

このライガーは人語を理解し、かなり賢いですが、人語を喋りだす事はありません。

また、人間になつたりする事も在りません。

セシリ亞のペットです。

私は百獣の王と呼ばれるライオンを父に持ち、最も大きな体を持つアムールトラを母として生まれた。  
だが、私の身体には不具合が在り、生まれた時より死と隣り合わせの生活を余儀なくされる。

私を助けようと多くの人間が私の元を訪れ、そして去つていった。  
どうやっても私は助からない。

それが私の運命なのだと、当時の私は幼いながらも悟っていたものだ。

そして、誰も私に見向きもしなくなつた頃、私は一人の少女に出会つた。

今でもアレは、運命的な出会いだつたと感じている。

少女の名は、セシリア・オルコット。

おそらく彼女が私の元を訪れたのは偶然だろう。  
生まれて数ヶ月でありながら、私は他のライガー達よりも遙かに大きな体を持つていた。

だからこそ、私が死ぬ前に一目見ようと訪れる人間は少なからずいたものだ。

彼女も最初はその一人だつたのだろう。

だが、不思議な事に彼女は私の頭を撫でたのだ。

他の興味本位で訪れた人間たちは決して私の頭を撫でる事は無かつた。

死に行く身体の私に触るのを恐れたのか、それとも硝子細工でも扱うかのように慎重になつっていたのだろう。

だからこそ久しく飼育員以外に触れてもらつ事ができて、嬉しかった。

なんだかんだと言つても、私は人工交配によつて生まれた存在な

のだ。

故に、人が私から離れて行く事がどれ程寂しかった事か……。  
だからだろう、弱々しくなってしまった身体の全てを振り絞つて

彼女に向かつて頭を下げた。

それは、私の命を削つての敬意の表れだつた。

私から彼女に送る事ができる最大の感謝の表れでもある。

彼女は驚いていたよ。

そして、私にこう言った。

「……わたくしが助けてあげますわ。オルコット家当主の名に賭けて」

彼女の言葉は嬉しかつた。

だが、同時に「いまさらもう遅い」と思つてしまつたのも確かな事だ。

幾ら金が在るうとも、私が助からない事はすでに分かつていて。  
様々な富豪が私を生かす為に金を払い、私がいる国も多くの金を獸医に支払つた。

しかし、それら全ては無為に終わつたのだから……。

彼女、オルコット家も私を生かす為にかなりの額をつぎ込んだ。  
最初の方は彼女自身も私を励ましに来てくれたものだが、時が経つにつれて彼女は私を訪れなくなつてしまつた。

私は彼女が他の人間同様、私に興味を失つてしまつたのではない  
かと思つたものだ。

だが、当時の飼育員が言つた言葉。

「セシリアちゃんが来なくなつて寂しいかい？ 彼女はね。イギリスつて国で大事なお仕事をしているんだよ。お前には分からぬだろうけど、EISつていう特殊な乗り物の国家代表候補生としてね。がんばってるんだ。だから、お前も頑張るんだよ」

衝撃的だった。

ISというモノを私は知っている。

私の元を訪れた人間が口にしたのを何度も聞いていたからだ。

人間の世界が女尊男卑という時代に入ってしまった事も知っている。

篠ノ之・束という人物が、ISという鋼鉄製の鎧を作ったと言つ事も何度も聞いた。

だからこそ、私は当時の飼育員の言葉を正しく理解する事が出来た。

彼女が、篠ノ之・束という人物により混沌の坩堝に放り込まれた世界で必死に生きているのだという事を知つたのだ。

その情報は、私の緩やかに死に逝く身体に活力を注ぎ込むには十分だった。

私は……その時、生まれて始めて「生きたい」と願つた。

そして、その願いを込めて月夜に咆哮した。

こういう生まれだつた故、私は神など信じていなかつた。

だが、私は神見たのだ

白き獣……。

その身を白き鋼鉄で包み込み、金に輝く鋼の爪と牙を持ち、紅く爛々と瞳を輝かせていた。

あの姿を忘れはしない。

いや、忘れたくとも忘れる事は出来ないだろう。

私の身体はあの白き神を見た後、父と母からもらつた体毛は純白に染まり、金の瞳は紅く変わつた。

そして、この身は病弱から程遠くなり、短命という運命からも解放される。

この変化は奇跡と称されたが、この私に對して異質な興味を持つた存在が現れた。

それは篠ノ之・束という名前だけは知つていた人物。

私は一目見ただけで分かつた。

目の前に現れた女性は狂氣で染まり、世界に飽きている人物だと……だから私はその女性が事前情報から篠ノ之・束だと判断する事が出来た。

だからこそ、その狂氣が言つた言葉は今でも信じる」とは出来ない。

だが、感謝はしている。

「ねえ、あの子と一緒に暮らしたくない？ 変色して色々と変わったライガーなんて珍しいからねー。色々と研究されちゃうよ？ 君、頭良いでしょ？ 色々理解してるよね？ なら、私が手を貸してあげる。一緒に暮らせるよつにねー。暇つぶしとしては一度良いしねー」

篠ノ之・束は口から吐いた言葉を守つた。

私が変化してから一日。たった一日で私はオルコット家のペットとして特別に登録される事になる。

篠ノ之・束がイギリス政府に働きかけたのだろう。

一体何を言つたのやら、獸に過ぎない私には理解できない。

まあ、何にせよ。

私はこのオルコット家で主と暮らしむるという幸せを享受する事が出来ている。

本来ならば死んでいるはずなのだから、これ以上の贅沢など望むべきではないだろう。

「すやすや……すやすや……」

伏せている私の体に寄りかかり、健やかな寝顔を浮かべる主の顔を見られる事を白き神と篠ノ之・束に感謝しよう。

主の重さすらも私にとつては幸福の一部だ。

だが、主は国家代表候補であるが故、いつもしていらっしゃる時間は残り少ないだろう。

高校生に上がった時、きっとHHS学園に入学する為に日本へと旅立つてしまうのだろう。

私に出来る事は、ただ主の帰りを待つて静かにこのオルコット家を守るだけ……。

そんな事を考えていた時期も在った。

なぜだ……。

なぜか目覚めると檻に入れられ、飛行機らしき物に乗せられてい るのだ！？

というか、コレは何処に向かっているう！？

ライガーとは？

ライオンを父に持ち、タイガー（トラ）を母に持つ異種間の雑種・交配種の事。

ライガーは足を伸ばした際の身長は最大で約3.56m、体重は450～600kg程にもなるネコ科最大の動物です。

正式な学名がない為、ライガー（ライオンからライ、タイガーからガー）と呼ばれています。

オスのライガーが生殖機能を持ちませんが、メスのライガーは稀に生殖機能を持ち合わせていて場合が在り、子を成す事があります。しかし、残念ながら生まれた子はどちらであっても生殖機能を持ち合わせることがないため、基本的に一代だけの種です。

ライガーは神経欠陥、遺伝子の異常、病弱などにより、ほぼすべてが短命という運命を背負っています。

果たして何時間ほど空のうえを旅しているのだろうか？  
この飛行機が何処に向かっているのか、どういった飛行機なのか、  
私は知らない。

……。

ふう、世の中には密売というものがある。

密売人からしてみれば、私という健康体の白いライガーは金のなる木というヤツなのだろう。

だが、それならば見張りとなる人間が付いているはずだ。  
主と見たスパイ物の映画では、密売人は密売する物を必ず見張つ  
ているというセオリーがあつた。

無論、現実と空想との違いは分かる。

ここが密売人の所持する飛行機の中ではない事など分かっている。  
しかし、私をさらつてなんとするのだろうか？

「ぴんぽん、ぱんぱん」

微妙に間延びした声が機内に響いた。

この飛行機の持ち主だろう。

というか、私はこの声の主を知つていて

「やあ、久しぶり。この天才束さん航空が向かっている先はI.S学  
園上空でーす。君はゴーレム試作機と一緒に落下して貰うよ？ あ  
の未確認が君に与えた力、見せて欲しいな」

以前会った時同様、冷たく見下すような声色。

私を物と認識しているのだろう。

否、実験動物と考えているのだろうが、この存在ならば致し方ない。

しかし、力とは何だ？

「あの未確認、仮にZEROと呼称するけどさー。そのZEROは天才束さんですら見つけるのが遅れたんだよね。アレって何なのかな？　ISじゃないし、機械でもないし、生命体でもないしねー。一瞬だけ確認できた反応はすぐ消えちゃってさ。次に反応が現れたときに行つたら君がいたわけなんだ。だから、あの未確認は間違いないく君と一つになつている。この天才束さんですら分からぬ存在……。暇つぶしとしてはちょうど良いよね？」

何を言つている？

この狂つた存在を理解できる者はいるのだろうか？

私の一生では、どんなに頑張つても理解する事は出来ないに違いない。

むしろ、理解などしたくない分類に入る人間なのかもしれないな。「君が世界に順応しやすいように調整はしとしてあげる。その力はISつて事にしどくからね？　それじゃ、頑張つて束さんの暇つぶしになつてねー」

篠ノ之・束が何を言つているのか良くわからないが、力とやらが私には在るらしい。

しかし、私はその力とやらを理解してはいない。

一体何のことを言つているのやら？

『1時間ほどでエリ学園に到着いたします。乗客の方は落下にお備えください』

物騒な機械音声が響く。

篠ノ之・束の声が聞えなくなつた事と生命の気配が先ほどから一切感じられない事から、どこか遠くから私の状況を見ながら話していたのだろう。

しかし、落下するとはどういう事なのだろうか？  
まあ、なんにしても、一時間ほど猶予が在るらしい。  
それならば何かしら対策を練る事も出来るだらう。  
とりあえずは、この檻から……。

ん？ なんだ、鍵は掛かっていなかつたのか？ とりあえず、周りを見てみるか……。

今まで乗つた事のある飛行機に比べて若干丸みを帯びている様な気がしないでもない。

丸い窓らしきものがあるが、そこから翼を見ることは出来ない。  
機内には私が入つていた檻と鋼鉄製の棺桶の様な物が置いてある  
だけで他には何もない。

隣の部屋、恐らくは機長室などが在ると思われる場所へ続く扉も  
確認できない事から、密室状態であることが分かるのだが……。

エンジン音もしなければ、飛んでいる音もしない。

振動も私が殆ど感じないのでから、人間ならば全く感じる事は出来ないほどのものだ。

最悪、私が乗つてているのは飛行機ではない可能性がある。  
よくよく考えてみれば、篠ノ之・束が関わつている時点での乗り物も何か未知の物体である確立が高い。

99.9%くらいで二エンジンの形である事も予測できる。  
ま、これ以上の事を私が考へても意味はないだらう。  
むしろ、私が一人だと会話もないし、私が喋つたといひで……。

「！」

とまあ、母譲りの鳴き声となる。

ちなみに吠えると……。

「 ? ? ? ? ? ? ? ? . 」

父譲りの吠え声となるわけだ。

喋れたりすれば便利なワケだが、種族が違つ故にそれは不可能といふモノだらう。

まあ、主は私が喋らざとも私の成したい事を理解してくれる故、人語を喋る必要性はないだらうな。うむ。

さて、残り50分ほどか？ これ以上探索する所もないし、他にやることもない。

よし、寝よう。

。

。

10分後。

『 一ノジン航空を』利用頂き有難う御座います。本便は残り10分ほどで途中分解致します。衝撃に備えてお待ちください』

空中分解するのか？ 私は飛べないんだが？ と、いうか、高度はいまどれくらいなんだ？ それと、天才束さん航空じやなかつたのか？ いや、いまはそんな事はどうでもいい。

窓から見える景色は青い空と白い雲ばかり……。  
下を見るることは出来ない。

少なくとも雲の上を飛行しているという事になるわけだ。

一言に雲の上と言つても高度は様々ある。

飛行機はたいてい高度1万m程の所を飛ぶらしい。

「この飛行機モドキの高性能エンジンならび、2万mくらい軽く超えていそうだ。」

確かに、空の上は寒いと聞いた事がある。

主の侍女であり、私のご飯係りでもあるチエルシー・ブランケット、チエルシー殿が言っていた。

「どうしたの？ 空ばかり眺めて」

「……」

「セシリア様と一緒に見ていたテレビで雪が映っていたわね。だから空を眺めているのかしら？」

「……」

「雪はね。空から落ちてきた水が固まって結晶になったものなの？ わかる？ でもね。地上暖かいと途中で溶けて雨になってしまつ。だからね。雲の上がすつごく寒くないと雪にはならないのよ？ でも、雲の上は元々かなり寒いから高いところでは雪が見れるかも知れないわね」

確かにこんな様な内容だったと記憶している。

チエルシー殿は私に話しかける時、まるで幼子に話聞かせるように喋る癖がある故、言われた事が全部正しいとは限らない。

だが、雪が空から降つて来る事は確かだ。

こんな所で空中分解されたら凍つてしまふかもしれない。

『また、本便に搭載されている「一レム試作型はセシリア・オルコットを攻撃対象としています。E.Uをまとっていない状態であつても攻撃を行う為、ご注意ください』

なに？ 主を狙つたのか……。

自らを天才と称し、一部の人間以外には興味すら示さない。

私の事も玩具と認識している篠ノ之・束ならばやりかねないだろ

う。

しかし、ここで外に放り出されれば、たとえ寒さに耐える事が出来たとしても空を飛ぶ事が出来ない私は地面に叩き付けられて死ぬだろうな。

空を飛べない生命体がこの高度から落とされて生き残る方法は……。

あるのか？ いや、ないだろうな。

ならばせめてゴーレム試作型とかいう物を壊れれば良いが、あの鋼鉄の棺桶を破壊する事は私では不可能だ。

そして、あの中身であるゴーレム試作型といつものIESなのだろう。

篠ノ之・束が関わっているのならば、IES以外は思いつかない。

『カウントダウンを開始します。残り300秒』

はあ、せっかちな事だ。

もう少しコツクリと対策を考えさせてもらいたいものだが、こちらの都合には合わせてもらえないのだろう。

私が死ねば、主とチャルシー殿は悲しむだろう。

私が死ねば、目の前にあるゴーレム試作型が何の妨害も受けずにIES学園で学生生活を送っている主を攻撃する為に動き出す事だろう。

空中分解で死なず、外の寒さも耐え切つたとしよう。

だが、着地はどうする？

確かに私は父よりも母よりも優れた個体なのだろうが、この高さから落ちて無事なワケがない。

あの白い神でも無い限り……。

『残り174秒』

ふむ、そういえば私が生まれた施設の飼育員が言っていたな「困った時の神頼み」と……。

人工交配により生み出された私に……。自然の子ではない私を想ってくれる神がいるかどうかは知らないが、いるのならば！

『残り105秒』

白き神と同じ身体が欲しい。

私の前に立ち塞がる壁を完膚なきまでに木つ端微塵にする事が出来る力！ 主を守れる身体、如何なる敵をも引き裂ける爪、あらゆる物を噛み碎ける牙、母にも近しい俊敏性、父にも優るとも劣らぬ霸気が欲しい。

私は野生ではない。人工的な獣だ。

だが、欲しい。

主を守るという本能が欲しい。

『残り34秒』

。 。  
。 。  
。 。

青と白が戦っていた。

白は青よりも強く、青の命令により飛び交う妖精を一閃し両断する。

両断された妖精は、慣性に従つよつて白の横を通り過ぎ、爆散した。

青に勝ち田はないだろう。

青は白を侮っていた。最初から白よりも弱いと思い込んでいた。ソレが敗北の理由。

白は自らの牙を研ぎ澄まし、青へと最速で突撃する。

だが、白は未熟だつた。

与えられた力に酔いしていた。

だから気がつかなかつた。

その牙に相手を噛み砕ける程の力が残されていない事に、気がつかなかつた。

白の牙は青まで届かず、決着を告げる音が鳴り響く。

そして、機械によりアリーナまで届けられた声が告げる。

『試合終了。勝者 セシリア・オル』

だが、その声は最後までアリーナに響く事はなかつた。

なぜならば、それを遙かに上回る音と衝撃がアリーナに響き渡つたからだ。

アリーナの地面に大きなクレーターを作り出し、瞬時にアリーナ全てを支配下に置いたソレは、一言で言つのならば鋼鉄の棺桶。ピットへの入り口を封鎖し、出入り口も封鎖する。

そして、観客席と会場とを分けるシールドを最大に設定し、外部の侵入を許さなくした。

白らがぶち破つて出来た上部の裂け田以外は……。

「な、なんだ？ 何が起こつて……」

「一夏さん！ 試合は中止ですわ！ 逃げますわよ

混乱する白、その手を掴み逃げようとする青。

だが、乱入者の支配下に置かれたアリーナはソレを許さなかつた。ピットへの入り口は固く閉ざされ、外へと出ることは出来ない。

「そ、そんな……。開きませんわ」

「それくらいなら俺の零落白夜で」

「無理ですわ。先ほどの戦いで一夏さんの白式はそのエネルギーを使いきつてしまっています。展開しているだけで精一杯のはずですわ」

「なら、セシリアの」

「……。わたくしももてる限りの力で戦いましたもの。エネルギーなんて残つてるわけありませんわ」

閉じ込められた白と青。

その後ろでは、鋼鉄の棺桶が開き、中身が姿を現した。

上半身は全身装甲型ISと言えなくもない。

首が無く、頭が肩に埋つてている様な見た目をし、異常に長い腕を持つている。

下半身は未完成なのだろう。

鋼鉄の棺桶から伸びる無数のチューブに繋がれ、エネルギー供給を受けている事が見て取れた。

作り掛けのIS。

それを無理やり動かしているようなイメージを受けるが、ソレは確かに敵意を青に向けていた。

最初のソレの敵意に気がついたのは白だった。

そして……。

「あぶねえっ……」

白は青を抱きかかえ、咄嗟に横へと転がる。

直後、先ほどまで青がいた空間を熱線が直撃した。

その出力は、現状の白と青の絶対防御を貫くには十分な威力。

白と青の背中に冷たい汗が流れ、表情が青ざめて行く。

特に青の変化は著しかった。

青も気がついたのだろう。

田の前のソレが青を狙い、死んでしまっても構わないと思つてゐる事に……。

観客席からその状況を見ている教師も気が気ではなかつた。突如現れた未確認、そして一瞬で支配権を乗つ取られた第三アリーナ。

放送などがない事から本当にすべての機能が乗つ取られた事を最強の名を関する教師の一人は察していた。

どうする事も出来ないこの状況に胸が押しつぶされそうになりながら……。

「……い、一夏さん」

「なんだよ？」

「わたくしから離れてください。アレの目的はわたくしの様ですし「震えてんのに何言つてんだ！ それにさ、女一人守れなかつたら男が廃るぜ」

白は青を抱きかかえ、残つたエネルギーで逃げ続ける。

当れば白は解除され、生身で敵の前に放り出される事になるだろう。

零落白夜はエネルギーが足らずに使用できない。

青は震え、完全に敵の殺意にも近しい敵意に飲まれてしまつて動けない。

だから、白は青を抱きかかえて逃げ続けた。奇跡を起きた事だけを信じて……。

。

。

そして、その奇跡は、白が死せる寸前に舞い降りた。

鋼鉄の棺桶があけた穴からもつ一つ、何かが敵に向かつて落ちてきたのだ。

敵は落ちてきたものを弾き飛ばす。

弾き飛ばされ、土煙をあげながら第三アリーナの壁にぶち当たつた何かは、ゆっくりと立ち上がる。

煙から映し出されるシルエット。

それは、3mほどの巨大な獣だった。

「????????!」

咆哮と共に土煙は晴れ、獣の姿が露になる。

カラーリングは白、鋼鉄製の体をし、鋭く並ぶ金色の牙を見せながら唸り声をあげる。

鋭く紅い瞳は敵を睨みつけ、金色の鋭い爪は敵を引き裂かんと力が込められていた。

見た目は鋼鉄製のライガー。

そして、誰の目にも明らかな事は一つ。

鋼鉄製のライガーが狙っている獲物が棺桶の様なエサである事、

そして明らかにライガーが怒り狂っている事の一つ。

## 02・困惑する獣（後書き）

主人公の名前を考えていませんでした。

また、セシリアが一夏に惚れた理由を強くする為にこの様な演出としました。

鈴の時にもゴーレム？は降つて来ます。

これ以外は原作側に沿つた形で書いて行きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9985z/>

---

青を守るゼロ

2011年12月31日18時49分発行